

医者として、被爆者の終わりなき人体 影響の現実を世界に発信し続けたい

原爆放射線が人体に及ぼす影響を40年にわたり研究してきた長崎大学医学部教授の朝長万左男さん(65)。白血病・骨髄異形成症候群(MSD)研究の第一人者です。自身2歳のとき、長崎原爆で爆

心地から2・7キロの自宅まで被爆しました。非核・平和の医師としても活動を続ける朝長さんに、3月末の定年を前に、新たな原爆後障害問題、核兵器廃絶への思いについて聞きました。

被爆の実相―生涯 持続型「原爆後障害」

私は原爆後障害の第2世代の研究者として40年間、研究に携わってきたのですが、原爆後障害の白血病はいつかは終わってしまうと思っていました。ところが、年

齢が高くなってから別のタイプの白血病が発症するといった状況が新たに出てきているんです。がんも今は治療が進歩して、第1のがんを克服する人が多くなってきました。第2のがんが5年後に見られるとか多量がんの問題も出てきています。とくに20歳以下で被爆した若年被爆者への影響

とが大きな課題になってくる。その原因究明については、まだ緒についたばかりですが、20歳以下で被爆したときに放射線をあびて障害を受けた細胞が人体の中で生き残っていないければならないわけです。となると、人体の中でそんなに長期間生き残れる細胞は、人体の各臓器の細胞の中で0・01%、1万個に1個ぐらしかないと幹細胞以外考えられない。幹細胞そのものが傷ついてないと、60年も70年も経ってがんが起きているという説明が

つかないんです。いま、その幹細胞を1000〜2000個集めて濃縮して純化する装置が研究室に入りましたから、被爆者から血液の幹細胞を採取して、どういう遺伝子異常があるかの研究が進めば、かなり原爆の医学的影響の解明になるだろうと思っています。

よく被爆者は「原爆が身体の中で生きていく」と言いますが、それは現実だということですか。だから、この観察にもついて何が重要かとすると、やっぱり被爆者がそういう「生涯持続型」の刻印を押されているという問題を、医学的に、また行政の対応に、きちんと反映しなければいけないということなんです。

行政はトータルで原爆医療の推進を被爆行政というのは、本質的にむずかしい問題を含んでいます。たとえば原爆症の認定作業でまず爆心地からの距離が問題になりませんが、長崎の場合は同心円になっていないし、実際の被爆線量の問題がからまっています。長崎は山あり谷ありの街なので、距離は近

くても谷あいにいれば放射線をあまり被曝していないとか、個別的な異なる問題があるわけですね。ですから、そういうものをひっくるめて行政がどう基準を設けるのが大事で、やっぱり被爆者サイドに立てばこれまでの基準は厳しすぎたかなと思います。我々科学者としても、「この距離でこの状況で被爆した人はこのくらい放射線をあびている」と簡単に計算できないんですよ。その意味では、厚労省が昨年3月に採用した新基準は、一応、いい方向になったと思っています。

ただ、4〜5キロの距離にいた人の中にも「自分は原爆を体験した」と強く認識している方が多い。そういう人も精神的に原爆の影響を受けているわけですか。私はやっぱり救済する必要があると思います。行政にはぜひ、トータルで原爆医療を推進してもらいたいですね。

(2面につづく)



福岡・博多駅前で=3月7日

白血病研究の第一人者、長崎大学医学部教授

朝長 万左男 さん

被爆行政というのは、本質的にむずかしい問題を含んでいます。たとえば原爆症の認定作業でまず爆心地からの距離が問題になりませんが、長崎の場合は同心円になっていないし、実際の被爆線量の問題がからまっています。長崎は山あり谷ありの街なので、距離は近

くても谷あいにいれば放射線をあまり被曝していないとか、個別的な異なる問題があるわけですね。ですから、そういうものをひっくるめて行政がどう基準を設けるのが大事で、やっぱり被爆者サイドに立てばこれまでの基準は厳しすぎたかなと思います。我々科学者としても、「この距離でこの状況で被爆した人はこのくらい放射線をあびている」と簡単に計算できないんですよ。その意味では、厚労省が昨年3月に採用した新基準は、一応、いい方向になったと思っています。



とまなが・まさお
1943年長崎市生まれ。長崎大学医学部卒。72年から原研内科に勤務、90年から同教授。専門は白血病・MSDの病態、治療。長崎大病院副院長を経て、2006年同大学院医歯薬学総合研究科長。核戦争防止国際医師会議(IPPNW)日本支部副支部長。近著に『骨髄異形成症候群(MDS)の基礎と臨床』『ナカサキから平和学する!』(共著)など。

それで大学を卒業すると、白血病を研究したいという気持ちで原研(原爆後障害医療研究施設)内科に入りました。そこで、被爆者から出る白血病の研究を始めたのですが、それが延々と40年間続いて、先ほど述べたような新たな課題に向き合うことになったわけです。

核兵器廃絶を世界の一大潮流に

私にとって大学在籍中のもう一つの大きな思い出は、1980年に発足した「核戦争防止国際医師会議(IPPNW)」に所属して、核廃絶運動にずっとかかわってきたことです。

IPPNW発足当時、6万発とも7万発とも言われる世界の核兵器は、その後かなり削減されて、米口とも1万発を切るころまで減りましたが、最後の核兵器廃絶に向かう道筋がまだ見えていない。とくにプッシェ政権ではまったく停滞していました。さすがにアメリカ国民も現状の「チェンソ」を求めてオバマ政権を誕生させました。

しかし、大統領になっていくときだろうと思いましたが、大統領になって

その意味で、来年のNP T(核不拡散条約)再検討会議は、とても重要な会議になると思います。前回(2005年)はまったく失敗でしたから、今度は世界中からニューヨークに集結して、大きな声を上げて

できればそういう国際会議を日本で開き、これは夢

それが大学を卒業すると、白血病を研究したいという気持ちで原研(原爆後障害医療研究施設)内科に入りました。そこで、被爆者から出る白血病の研究を始めたのですが、それが延々と40年間続いて、先ほど述べたような新たな課題に向き合うことになったわけです。

いま日本の外務省も、オーストラリアと連合を組んで川口順子元外務大臣を共同議長にした「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」をスタートさせました。核廃絶を具体的なスケジュールを決めてやるべきだという考えも出てきています。私も4月からその委員になります。その最大の目標はやっぱり、オバマ政権が国際的な核廃絶の声をあげてリードしていくように、国際的雰囲気醸成することだと思います。

それで大学を卒業すると、白血病を研究したいという気持ちで原研(原爆後障害医療研究施設)内科に入りました。そこで、被爆者から出る白血病の研究を始めたのですが、それが延々と40年間続いて、先ほど述べたような新たな課題に向き合うことになったわけです。

それで大学を卒業すると、白血病を研究したいという気持ちで原研(原爆後障害医療研究施設)内科に入りました。そこで、被爆者から出る白血病の研究を始めたのですが、それが延々と40年間続いて、先ほど述べたような新たな課題に向き合うことになったわけです。

それで大学を卒業すると、白血病を研究したいという気持ちで原研(原爆後障害医療研究施設)内科に入りました。そこで、被爆者から出る白血病の研究を始めたのですが、それが延々と40年間続いて、先ほど述べたような新たな課題に向き合うことになったわけです。

それで大学を卒業すると、白血病を研究したいという気持ちで原研(原爆後障害医療研究施設)内科に入りました。そこで、被爆者から出る白血病の研究を始めたのですが、それが延々と40年間続いて、先ほど述べたような新たな課題に向き合うことになったわけです。

それで大学を卒業すると、白血病を研究したいという気持ちで原研(原爆後障害医療研究施設)内科に入りました。そこで、被爆者から出る白血病の研究を始めたのですが、それが延々と40年間続いて、先ほど述べたような新たな課題に向き合うことになったわけです。

それで大学を卒業すると、白血病を研究したいという気持ちで原研(原爆後障害医療研究施設)内科に入りました。そこで、被爆者から出る白血病の研究を始めたのですが、それが延々と40年間続いて、先ほど述べたような新たな課題に向き合うことになったわけです。